

ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生（二）

——『バルザズ・ブレイス』以前のラヴィルマルケ——

梁 川 英 俊

V パリの自由主義的カトリック

パンション・バイイ

さて、パリにやってきたラヴィルマルケが腰を落ち着けた先は、エストラパード広場の「パンション・バイイ」Pension Baillyであった。法科大学にほど近いこの施設には、両親の勧めですでに兄も住んでいたのである。ところで、このパンションはただのパンションではなかった。

主人の名は、エマニュエル・バイイ Emmanuel Bailly。ノール県サン・ポールに生まれ、アミアンで司祭となるべく教育を受けたこの人は、ソワソンの中等神学校で教鞭をとったのち、一八一九年、パリのカセット通りにパンションを開く。寄宿生の大半は法科大学の学生で、故郷ノール県はもちろんのこと、ブルターニュやヴァンデなどカトリック信仰が篤いフランス西部地方の出身者が多かったという。実際、ラヴィルマルケ以前にも、ブルターニュ出身の錚々たる人物が幾人もこのパンションで青年時代を過ごしていた⁽¹⁾。

ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生（二）

ところで、バイイがパンションを開いた王政復古期は、またフランスにおけるカトリックの復活の時代でもあった。「大革命」以後、四半世紀にわたって冷や飯を喰わされてきたこのかつての国教は、一八一四年、ナポレオンがエルバ島に流されるや、フランスを再びキリスト教徒の地とすべく活発に動き始める。ブルボン朝の復活とアンシャン・レジームへの完全な復帰を目指す過激王党派は勢力を拡大し、教育制度におけるカトリックの牙城であったイエズス会もまた息を吹き返しつつあった。

文学では、すでにシャトーブリアンが『キリスト教精髓』*Genie du christianisme*（一八〇二年）や『殉教者』*Les Martyrs*（一八〇九年）を発表してキリスト教に新たな息吹を吹き込んでいた。が、王政復古期に過激王党派の理論的支柱を提供したのは、ルイ・ド・ボナルド *Louis de Bonald*、ジョゼフ・ド・メーストル *Joseph de Maistre*、フェリシテ・ド・ラムネー *Félicité de Lamennais* からカトリック思想家の著作だった。彼らはともに理性の行き過ぎを戒め、個人の理性は神の存在を認めずして確実性に到達することはできないという伝統主義を説いていたが、メーストルやラムネーはさらに教皇の無謬の権威こそ信仰における個人と社会の機軸であるとする教皇至上主義を唱導してもいた。

「教皇至上主義のジュピター」と綽名されたバイイは、とりわけラムネーの思想の熱心な信奉者だった。しかも彼は、過激王党派の秘密組織として知られる「コングレガション」*Congrégation de la Sainte-Vierge* のメンバーでもあったのである。しかしこうした事実から、ただちに彼を旧弊かつ頑迷なカトリック信徒と考えるはならない。それどころか、バイイの本領はむしろ活発な議論と学問を好むその開かれた態度にこそあった。その姿勢がとくに顕著になるのは七月革命以降であるが、すでにこのパンションを設立した当時から、バイイは「文学の会」*Société littéraire* なる会合を組織して若いキリスト教徒たちを集め、定期的に自由な発表や討論の場を提供していたのである。⁽²⁾

さて、シャルル十世の側近の貴族や高官など二千人に及ぶ会員を誇った「コングレガション」は、宣教や慈善事業など

を目的とした広大な支部組織を、フランス全土に網の目のように張りめぐらしていた。「慈善事業団」*Société des Bonnes Œuvres* や「カトリック良書普及会」*Société catholique des bons livres* など、そうした組織は六十あまりあったと伝えられているが、一八二三年に創設された「善き研究会」*Société des Bonnes Etudes* もそのひとつだった⁽³⁾。

「善き研究会」の目的は、まず王党派の理念に忠実な青年たちを育成することにあつた。カトリックにとつては、まず青少年の教育を教会の手に奪い返すことが急務であり、この組織ももともとその一環として設立されたのである。ところで当初フォセ・サン・ジャック通りにあつたこの研究会は、創設の翌年、エストラパード広場へと移転する。新しい施設は階段教室や読書室つきの図書室まで備えた広大なものだった。当時は出版が比較的自由になつたせいでも、巷では「啓蒙哲学」をはじめカトリックの理念に悖る書物が、帝政時代以上に大量に出回つていた。しかし、この「善き研究会」の図書室からは、そうした「悪書」は一掃されていた⁽⁴⁾。もつともカルチエラタンの中心に位置するこの施設は、この種の純粹培養にはあまり適してはいなかつた。若者たちはやがて創設者たちの思惑とは裏腹に、王党派以外の価値観をも積極的に受け入れ、社会の変化に対応した新しい信仰の形を模索しはじめるようになる。

こうした彼らの意識の芽生えに、バイイもまた無関係ではなかつた。というのも、「文学の会」は、「善き研究会」の移転後、その階段教室をしばしば利用するようになっていたからである。のみならず、彼は一八二五年には手狭になつたカセット通りの施設を引き払い、寄宿生ともどもこのエストラパード広場の「善き研究会」の建物に移り住んでしまう。こうして、そのパンションは事実上「善き研究会」と区別のつかないものになる。小柄な体躯と白髪混じりの頭のために、「バイイ爺さん」と呼ばれて親しまれた彼は、その活動を通じて次第にパリのカトリック青年の庇護者的な存在となり、会員数約四〇人と伝えられる「文学の会」には、ときに五〇〇人を越える人が訪れたという。

この「文学の会」の実質的な中心人物となつたのは、ブルターニュ出身のひとりの若者だった。名をルイ・ド・カルネ

Louis de Carné とすべ。

カルネとデクスタン男爵

『ブルターニュ三部会』、『十八世紀のフランス君主制』など少なからぬ著書を残したルイ・ド・カルネは、一八〇四年、カンペールに生まれた。ソルボンヌで学んだのち一貫して政治畑を歩いた彼は、一八三三年にフィニステール県の県会議員、三九年には代議士にも選出され、ギゾーのもとで外務省の通商局長などを務めたのち、二月革命を機に政界を引退。以後は歴史家として著述に専念し、一八六三年にはアカデミー・フランセーズの会員にも選出されるなど、十九世紀のブルターニュを代表する知識人として活躍した⁽⁵⁾。そのカルネが青年期に自己形成を遂げた重要な場所が「文学の会」であり、彼は創設当初からバイイの信頼を得て、その中心人物として活動したのである。

ここで当時の「文学の会」の議事録を紐解こう。カルネの名はその最初期から現れ、議長や秘書として、また多くの会合の主宰者として記録されている。たとえば一八二三年には、「政治・歴史・文学の観点から考察された任意の一民族の全史を一貫した方法で研究する計画」を提案し、当時独立をめぐるオスマントルコと争っていたギリシャを組上に載せている。しかもその際には、ギリシャの現状を古代まで遡りつつ論じることの重要性を、繰り返し強調することも忘れないう。また翌年には、「叙事詩」をテーマにした朗読会を行い、インドの詩歌や『ニーベルンゲンの歌』、あるいは『オシアン』などを例に引きつつ、フランスにはこの種のものがまったくないことに注意を促している⁽⁶⁾。

ところで、こうしたカルネの学問的傾向の背後にはひとりの人物がいた。デクスタン男爵 baron d'Eckstein である⁽⁷⁾。今日ではほとんど忘れ去られているものの、この人物が王政復古期から七月王政期にかけてフランスの文学・思想界に与えた影響はきわめて大きなものがあつた。若きカルネが「わが唯一の師」と呼んで私淑したのみならず、ラマルチーヌや

ユゴーもまたその慧眼に一目置き、しばしば彼に助言を仰いでいたのである。

この時代、学問の世界では、ギリシヤ・ローマの威信が揺らぎ始めていた。ウィリアム・ジョーンズの有名なサンスクリット研究を始め、年々増大するギリシヤ・ローマ以外の言語や文明に関する知識は、永らく西洋文明の規範となってきたこの両文明から、その権威を奪い去った。とりわけフランスでは、ナポレオンの没落がそれにさらに拍車をかけた。この傾向は、しばしばギリシヤ・ローマと同一視された合理主義にたいする反発と相俟ってさらに増幅された。こうした趨勢の一翼を担ったのが、ほかならぬデクスタン男爵だったのである。

デクスタン男爵、ことフェルディナン・エクスタン Ferdinand Eckstein の生涯には謎が多い。男爵と名乗ってはいるが、男爵の家系でもなければ、爵位を受けた形跡もない。その豊富な東洋語の知識も、どこで身に付けたのかは詳らかでない。知られているところでは、一七九〇年、デンマークに生まれ、ハイデルベルク大学で、文献学の泰斗クロイツァー Creuzer や著名な東洋学者ヴィルケン Wilken らに師事したという。またシュレーゲル Schlegel との親交もあり、その師弟関係は大変に緊密なものであったとも伝えられる。いずれにせよ、こうした経歴や交友関係を背景に、デクスタンはフランスにおけるドイツの新しい学問や思想の動向を伝えるスポークスマンとして活躍したのである。

なかでも重要なのは、一八二五年に創刊された雑誌『カトリック』の編集である。そこで彼は、ドイツにおける文献学や神話学などの最新の学問的成果を伝える一方、サンスクリット語をはじめとするその豊富な語学力を活かして、『ラーマヤナー』や『マハーバーラタ』、『ニーベルンゲンの歌』や北欧の『サガ』、さらにはアイルランドやアラブやボヘミアの民衆歌にいたるまで、フランスではまだなじみの薄かった諸民族の歴史や伝承を積極的に翻訳・紹介した。

こうした探索を通じてデクスタンが求めていたのは、いわばカトリックの正当性の学問的な基礎づけであった。それは諸民族の起源には共通して「神」の觀念が見られ、そこに原初の「啓示」を垣間見ることができるといふ確信によって支

えられていた。たとえば、彼はつぎのように言う。

それがいかに墮落したものであれ、あらゆる原始的な信仰のうちには、とりわけ人類の揺籃期にもっとも近いアジアの教義のうちには、伝統的な啓示的真理の源泉がある。それをカトリシズム以前のカトリシズムと呼ぶこともできよう⁽⁸⁾。

デクスタンにとって、異教徒の信仰の起源を探究することは、そのままカトリック信仰の原初的な形態を明らかにすることであり、その普遍性を保証するはずのものであったのである。もっとも、こうした考えはシャトーブリアンやメーストルやラムネーによってもすでに主張されていたものであり、カトリックの伝統主義においてはけっして目新しいものではなかった⁽⁹⁾。デクスタンの新しさは、なによりも彼がそうした思考を展開する際に援用した豊富な資料と学識にあったのである。

ところで、その編集・執筆の大半をデクスタンの独力によったこの『カトリック』は、一八二九年、その発刊を停止する。しかしその同じ年、彼の周囲に集まってきた青年たちが『コレスポンダン』*Le Correspondant*を創刊すると、デクスタンは再びその中心人物となる⁽¹⁰⁾。バイイが資金を援助し、編集責任者としてカルネとエドモン・ド・カザレス Edmond de Cazales⁽¹¹⁾が名を連ねたこの雑誌は、古代オリエントやケルトやスカンジナビアなどギリシャ・ローマ以外の諸文明を重視するというその編集方針において、まさに『カトリック』を引き継ぐものだった。

しかしこの雑誌の寿命も長くはなかった。一八三〇年にラムネーが名高い『未来』*L'Avenir*を創刊すると、思想的傾向において相似た『コレスポンダン』は、カルネいわく「巨船の荒々しい航跡に呑み込まれた小船のように⁽¹²⁾」消え失せ、

翌一八三二年に内容を一新、『ルヴュ・ユーロペエンヌ』*Revue européenne*と改称して再スタートを切ることになる。

『ブルターニュとその歴史について』

この『ルヴュ・ユーロペエンヌ』においても、ルイ・ド・カルネは主要な執筆者のひとりだった。彼はそこに『王政復古の歴史についての考察』*Vues sur l'histoire de la Restauration*など多くの論考を寄稿したが、ここでわれわれが注目したのは、一八三二年に掲載された『ブルターニュとその歴史について』*De la Bretagne et de son histoire*である。以下、簡単にその内容を見よう。

著者はまずダルジャントレやロビノーやラトゥール・ド・ヴェルニユの名を引きつつ、ブルターニュは他の地方に比べ多くの歴史家に恵まれているものの、その記述の大半は政治史に限られていると指摘する。しかもその論点たるや、もっぱら過去における独立である。ブルターニュの歴史を政治史に還元するこうした姿勢ほど間違ったものはない、とカルネは言う。

そもそも歴史家が誇る過去のブルターニュの独立など、ヨーロッパの政治史上、大きな影響力をもったことは一度もない。デュ・ゲ克蘭からアンヌ・ド・ブルターニュまで、ブルターニュが誇る歴史上の人物は、ブルターニュというよりはむしろフランスの歴史に属している人たちである。独立国という過去の栄光に執着する限り、ブルターニュを他の地方から分かつ真の独自性は見えてこない。

ブルターニュのナショナリテはたぶん独特なもので、それはいまも消え去っていない。いわんや過去においては尚更である。しかし、それは都市のサロンや大通りを走る乗合馬車のなかにないように、歴史のなかにもない⁽¹³⁾。

では、それはどこにあるのか。この問いにカルネは「風景のなかで形成される歴史、霧のなか、あるいは砂浜の上の白い「ドルメン」にかかる波の音のなかに書き込まれる歴史、すなわちいま生きている歴史⁽¹⁴⁾」のなかに、と詩的に答える。つまり、ブルターニュに必要なのは「詩」*poésie*なのである。

われわれは詩の源泉にまで分け入っていない。廃墟の信仰を信じ、廃墟に問いかけることができる旅人が、われわれの野趣に富んだ土地を一步一步進む度に拓けてくる、あの詩の源泉にまで⁽¹⁵⁾。

カルネが例として挙げるのは、たとえばシュヴァリエ・ド・フレマンヴィル *chevalier de Frémerville* の『ブルターニュの古代』*Antiquités de la Bretagne* (一八二七—一八二八年) である。ここでは旅人が古代の影を追って山に登り、点在する巨石や樹齢数百年の檜の木、清冽な水を湛えた泉にその来歴を問う。このような姿勢こそが、この地方に向き合うときの正しい態度なのだ、とカルネは言う。ブルターニュの独特な雰囲気をつくったのは、史書が語らぬキリスト教渡来以前の闇の時代であり、その名残はいまも風景や遺跡のなかに刻みつけられているからである。

このときひとつの場所が特権的なものとして浮かび上がる。バス・ブルターニュ地方である。なぜか。それは、当時、この地方だけがローマの侵略を免れ、古のケルトの言語や文明をそのまま保存したと考えられていたからである。この仮説は今日ではほとんど支持を得ない⁽¹⁶⁾。しかし、カルネはこれを論拠に、キリスト教の渡来に関する次のような確信を導き出した。すなわち、「バス・ブルターニュ地方では、キリスト教とそこに淵源する近代文明は、ガリアとドルイドの古い幹に接木されたのである⁽¹⁷⁾」。

彼の主張を聴こう。バス・ブルターニュ地方にキリスト教を伝えたのはローマ人ではない。アイルランドから来た宣教

師たちである。しかも彼らはその信者を、まずドルイド階級のうちに見いだした。いふなればドルイド教は、キリスト教の到来を前に、自ら道を譲ったのである。「人類のあらゆる宗教的伝統は、カトリック信仰の崇高な統一のうちに寄り集い、調和する」がゆえに。「キリストが破壊のためではなく、仕上げのためにやって来た」がゆえに。「消滅させるのではなく、聖化するために来た」⁽¹⁸⁾がゆえに。

こうしたカルネの主張のうちに、デクスタンを始めとするカトリック思想家の影響を見るのは容易だろう。つまり、ブルターニュはここで、その始原における異教との穏やかな融和のゆえに、カトリックの普遍性を保証する理想的な場所として立ち現れてくるのである。

「詩」の土地ブルターニュは、「妖精」や「円卓物語」を生んだ。メルランもタリエシンもモルガーヌもアーサー王の家臣の大半も、皆ここで生を享けた。中世騎士道文学もまずブルトン語で書かれ、それからノルマン語やプロヴァンス語に翻訳されたのである……⁽¹⁹⁾。

こう主張するカルネの論文には、のちのラヴィルマルケのブルターニュ像を構成する要素が、ほぼすべて出揃っている。ラヴィルマルケがパリに出るよりも早く、そのブルターニュ像の土台となる部分は、実はすでにカルネの、あるいは「文学の会」の周辺であらかた準備されていたと言っていいたいだろう。

『州の復活について』

ところで、ブルターニュという旧州名は、大革命後、「州」*province*に代わって「県制」が施行されたとき、すでにフランスの地図から消えていた。しかし、だからといってそれは州がフランス人の生活習慣から消え去ったことを意味してはいなかった。実際、先のカルネの論文とほぼ同じ頃『ルヴェ・ユーロペエンヌ』に掲載された論文『州の復活について』

De la résurrection des provinces は、まさにそのことを問題にしていた。「一ブルゴーニユ人」とのみ署名されたこの論文は、なぜ優れた人材を擁した王政復古が脆くも崩れ去ったかを問い、こう言っている。

七月の破局が露わにしたものがあるとするれば、それはまさに一個の体制が抱えていた本来的な欠陥である。それはあまりにも現実にそぐわず、庶民の生活習慣と離れていたため、そよと風が吹いただけでふっ飛んでしまったのだ⁽²⁰⁾。

ここで言われる「本来的な欠陥」とはほかでもない、中央集権体制である。王政復古は税制の整備に汲々とし、森林法によって市町村を収用し、あらゆる利益をパリに、あらゆる財を証券取引所に集中させ、パリの官吏によって地方の有力者の力を弱め、州を無力化した。地方ではパリから派遣された知事が雇用の四分の三を握り、年功序列と縁故主義が幅利かせ、いかに有能な若者といえども将来に希望がもてず、なかにはパリに出てジャーナリズムに身を投じ、体制に噛みつく者もいた。こうした事態を変える方途として、望ましきは州の復活である、と著者は言う。

ああ、貧しく痩せ衰えたパリ、人で溢れるこの街の代りに、どうか私に州を与えてもらいたい。主邑はもちろん、教育・行政・産業に携わる数々の施設と、ひとつの政府を備えた州を⁽²¹⁾。

しかし、なぜ州なのか。それは、県が人工的な行政区分であるのにたいして、州はそれぞれが「明確なナシヨナリテ」によって特徴づけられているからだ。「州とはナシヨナリテであり、さもなくば何ものでもない⁽²²⁾」。しかも、「それはいまだに消え去ってはいない⁽²³⁾」。

フランスの地図にノルマンディーやブルターニュはもはや存在しないが、ノルマン人やブルトン人は、フランス人と同様、いまも存在するし、今後も存在するだろう⁽²⁴⁾。

かつては多くの優れた人材が、パリのサロンを知らず、州から生まれてきた。しかし州なきいま、そうした人材もない。「ドイツを見るがいい」と著者は言う。「その知的豊かさはただ一個の街が独占的に所有するものではない。ベルリンにはフンボルト、アンション、サヴィニー、ヘーゲルのような人々がいる。ミュンヘンにはシエリングやバーダーやゲレスのような人材がいる。ワイマールにはゲーテのほか、ヘルダーやヴィーラントやシラーがいる。ハイデルベルクやイエナやゲッティンゲンもまたそれぞれに今をときめく才能をもつ⁽²⁵⁾」。

真に力強い才能はパリの温室からではなく、州の自然な樹液によって生まれるのだ。州という明確なナショナルリテに基づく自然な区分を、いま一度行政単位として復活させることが、フランスに活力をもたらすことになるのではないか。一八一四年には不可能であったそれは、アンシャン・レジームへの恐怖が薄らいだいま、十分に可能なのではないか、と著者は言う。いずれにせよ、「フランスが県に細分化されている限り、われわれは何もできまい⁽²⁶⁾」。

「ブルゴーニュ人」がこのような主張をするのは、理由のないことではなかった。というのも、当時のブルゴーニュ、わけてもディジョンとブザンソンは、伝統主義とラムネー思想の牙城のひとつだったからである。一八二二年に創設された「ディジョン研究会」*Société d'études de Dijon* は、バイイの「文学の会」とも縁が深かった⁽²⁷⁾。家族や州のような自然な共同体が生活の基本単位であるという考えは、当時カトリックの周辺ではかなり根強いものだったのである。ちなみに、ラムネーの雑誌『未来』もまた、地方分権と地方の自由をその主要な要求のひとつとして掲げていた。

しかし、それにしても、なぜ州なのか。あるいは、なぜここにきて州の自然なまとまりがことさらに強調されるように

なったのか。それを理解するために、ここでひとつの語に注目してみたい。それはさきのカルネの論考にもしばしば登場していた「ナショナリテ」という語である。ほかでもない、州の問題がクローズアップされてきた背景には、この語の存在が少なからず関与しているように思われるからだ。以下、その来歴を辿ってみよう。

「ナショナリテ」の誕生

今日、主に「国籍」の意味で使用される「ナショナリテ」という語がはじめてフランス語に登場するのは、一八〇七年、スタール夫人の小説においてである⁽²⁸⁾。それもたった一度きりで、以後は有名な『ドイツ論』のなかにすら現れない。「ナション」*nation* という語の登場が一二七〇年、「ナショナル」*national* が一五五〇年、「ナショナリズム」*nationalisme* が一七九八年であるから、この語の登場はまた随分と遅い。ちなみに辞書にはじめて記載されるのは、一八二三年。一般に知られるのはさらに遅く、フリードリッヒ・ルードヴィッヒ・ヤーン *Friedrich Ludwig Jahn* が一八一〇年に出版した『ドイツの国民性』*Deutsches Volkstum* の仏訳本『ナショナリテの研究』*Recherche sur la nationalité* (一八二五年) がきっかけであった。

ところで、この本のドイツ語原題に見える *Volkstum* という語は、もともとヤーンの造語であった。この時代、ナポレオンの侵攻によって国民意識に目覚めたドイツでは、フランス革命の「国民」概念を換骨奪胎しつつ、独自の国民意識をつくりあげようとする試みが進められており、こうした時流のなかで、ヤーンは *national*、*Nationalität*、*Nationaleigentum*、*ligkeit* など既存のフランス語起源の語彙に訴えることなく、自ら新しい概念を生み出したのである。そしてこの *Volkstum* の訳語として、仏語版の翻訳者 *P. Lorel* が採用したものがこそ、ほかならぬ「ナショナリテ」だったのである。彼は「序文」にこう書いている。

この著作の表題に使われている「ナショナリテ」という語は、おそらく純正論者にはけしからぬものと映るだろうし、書物の内容を表題から判断しようとする人たちを満足させるものではない。しかし私はフランス語のなかでほぼ同じような意味で使用される語として、これ以上のものを見つけないことができなかったのだ⁽²⁹⁾。

このロルテの言葉は、当時のフランスでは、まだ「ナショナリテ」という語の使用に相当な抵抗があったことを雄弁に物語っている。もっともその抵抗感のゆえに、この語が造語の訳語として相応しく感じられたこともまた確かであろう。では、当のヤーンはそもそもこの語で何を言おうとしていたのだろうか。いまなおドイツ民俗誌の創始者として記憶されるこの人は、この著作の「序文」のなかで、つぎのように書いている。

個性性を集め、それをグループに束ねるこの力は、そうして形成された一個の全体を、さらに大きな集まりへと結びつけ、それを諸世界の配置へと関連づけて、その集積が揺るぎない堂々たる総体を形成するまでに至らしめる。いかに優勝的かつ広大な人間の諸社会をも結びつけるこの結合力は、国民にあつては、「ナショナリテ」以外の名をもたない。すべて国民なるもの——その慣習的な存在様態（固有の本質）、その運動と生、その再生産の力、その伝達能力——はここに原因する。かくて思考や感情、愛や憎悪、満足と悲哀、忍耐と行動、喪失と享受、希望と欲望、予感と信念は、国民的な一個の性質をもち、国民のあらゆる部分に影響を及ぼす。無数の絆が、その自由や独立を損なうことなく、個々の人間を均質な共同体に束ねている。われわれの言語はもちろん、管見の及ぶいかなる言語にも、変化しつつも不変であり（……）、転覆させることも滅ぼすこともできず、あらゆる国民の歴史を浸すこのものを表現する言葉はなかつたのだ⁽³⁰⁾。

ドイツ的思考の特質を残すためだけ意識は避けたというロルテの言葉通り、その訳文はけっして読み易いものではない。しかしそれはまたその難解さゆえに、国民に共通の性質を付与する「実体」としての「ナシヨナリテ」という概念を説明することが、当時はまだどれほど困難であったのかを逆に物語っているとも言える。実際、王政復古時代には、この語を自分の術語として使う人はまだ稀だった。その使用が一般的になるのは、七月革命以後のことであり、わけても多用したのは、親ドイツ派の作家たち、なかでもオーギュスタン・テイエリをはじめとするドイツ歴史学の影響を強く受けた歴史家たちであった。ヘルダー以後のドイツ・ロマン派の思想をフランスに伝える上で、このヤーンの書物が果たした役割はけっして軽視されるべきものではない。

いずれにせよ、こうした事情を考慮すると、さきに見た『ルヴュ・ユーロペエンヌ』におけるこの語の使用は、かなり早いものであったことがわかる。ちなみに、カルネの論文でこの語が使われるのは五回、『州の復活について』では実に十一回である。この雑誌におけるドイツ思想の浸透は、無視し得ぬほど大きなものだったと言わなければなるまい。

ともあれ、「国民」や「州」という問題系のなかに、この「ナシヨナリテ」という実体概念が流通することで、当時の思考がどれほど影響を受けたかは想像に難くない。なによりも、それは従来実体としては表象し得なかったような事象の下に、実体を想定することを可能にしたのである。

ところで、一八三八年、この「ナシヨナリテ」という語に次のような定義を与えた人がいる。「個人にあっては人格をつくる思想の永続性が、諸国民にあってはナシヨナリテを形成する³¹」。名をフレデリック・オザナム Frédéric Ozanam という。

オザナムと「歴史・哲学協議会」

一八三〇年、「栄光の三日間」を皮切りにはじまった七月革命は、カトリックに壊滅的な打撃を与えた。かつて「神の祝福」により国王となったシャルル十世は退位を余儀なくされ、聖職者が僧服を着て街を歩くこともできなかつたと言われる、激しい反教権主義の嵐がフランスに吹き荒れる。そしてこの嵐は、「コングレガション」や「善き研究会」など、復古王政期のカトリックの牙城をつぎつぎと解体していった。続く「市民王」ルイ・フィリップとともに現れたのは、反カトリック的なブルジョワ王政だった。国家の後ろ盾を失ったカトリックにたいして、自由主義陣営はジャーナリズムで、大学で、法廷で、容赦ない攻撃を浴びせかけた。

こうした厳しい逆風のなかで、ほかならぬパンシオン・バイイを拠点として、あるべきカトリックの新しい姿を求める一群の青年たちが現れる。その中心にいたのが、フレデリック・オザナムであった。

今日、貧者の救済を目的とした団体「ヴェンセンシオ・ア・パウロ会」*Société de Saint Vincent de Paul*の創始者として知られるオザナムは、一八一三年、ミラノに生まれた。幼少年期をリヨンで過ごした彼は、一八三一年にパリに上り、ほどなくバイイと出会う。オザナムは当時を振り返ってこう言っている。

ある友人にそこを訪ねるように薦められ、その扉を開けたとき、「善き研究会」はもうほとんどその名残をとどめていなかった。例の文学集会は、プチ・ブルボン・サン・シユルピス通り、七一番地にあった、バイイの新聞『トリビューン・カトリック』の狭苦しい編集室のなかに閉じ込められ、勉強会には辛うじて十五人ほどのメンバーが残るのみだった。しかも、およそ学問的とはいえないその環境は、真面目に何かを追求するには向いていなかった。そのおぼろげとした対話からは、過去や未来に関する高邁な問題など生まれてくるはずもなかった⁽³²⁾。

これが七月革命直後におけるバイイの周辺のありさまだった。しかしこうした絶望的な状況のなかで、バイイはいま一度学生たちの集会を立ち上げようとする。カトリックの学生ばかりではない。今度はいかなる思想信条をもった学生にも広く門戸を開放し、以前にも増して自由な討論を行なおうと提案するのである。こうして、彼らは一八三二年暮、メンバーの選択に取りかかる。会は「歴史・哲学協議会」Conférence d'histoire et de philosophieと名づけられ、オザナムは早速その副議長に任命された。

候補者は多様です。私たちは優れた知性をもつ数人の若者を採用しました。ヨーロッパ数カ国を旅した者、美術理論家、経済学の学徒もいますが、大半は歴史研究に携わっており、わずかながら哲学を専攻する者もいます。これら才能あふれる若者たちのなかには、途中で死んだり、生活上の困難によって妨げられたりしなければ、詩人になる者だっているでしょう⁽³³⁾。

こうして、パンション・バイイに新しい風が吹きはじめ。翌年、オザナムはこう言う。「かつてメンバーであった幾人か人の尽力のおかげで、いまやこの会は目覚ましく拡大しました⁽³⁴⁾」。さらに、「今日、「協議会」には六〇人近く集まりました。そのなかにはすごいひともあります。集った場所は広がったのですが、人で一杯でした⁽³⁵⁾」。

実際、この会は一年で会員数を四倍にした。こうした躍進の背景にあったのは、むしろ宗派や政治的立場を問わぬこの会の開かれた姿勢であった。そこにはヴォルテール主義者や理神論者、サン・シモン主義者も姿を見せ、活発な議論が展開されたのである⁽³⁶⁾。オザナムは書いている。「演壇ではさまざま意見が乱れ飛びました。議事録でこうした舌戦の記録を読めば分かりますが、この議論は真理への愛の結果なのです。意見が違ふときでも、「協議会」のメンバーは心では

つながっていました⁽³⁷⁾。あるいは、「討議はあらゆる意見に開かれています。サン・シモンの教義にさえ。プログラムから外された政治を除いて、議論の領域は無限であり、すべて完全に自由なのです⁽³⁸⁾」。

そして、われらがラヴィルマルケは、まさにこうした時代にパンシオン・バイイにやって来たのである⁽³⁹⁾。首都の青年たちの活発な議論は、田舎育ちの若者にはさぞや鮮烈な印象を与えたに相違ない。ここはやはりラヴィルマルケ自身に語ってもらおう。

たくさんの若者がきていた。年長者のなかには、かつて「善き研究会」に属していた者もいたが、集まってくるメンバーには新顔が増え、歳も若がり、人数も多くなっていた。主宰者は尊敬すべきバイイ氏で、施設も彼が提供していたが、その精神はいよいよ学問的かつ自由主義的になっていた。議長はオザナムがつとめ、集まりは「歴史協議会」とよばれた。ここでは宗教・哲学・歴史・文学に関するあらゆる高尚な問いが真剣な議論の対象となっていたのである。(……)オザナムは何度か発言した。その発言は喝采をうけたが、彼の書簡にはそのときの発言の一部が見つかる。「未来はわれわれのまえに大洋のようにひろがっている。勇敢なる船乗りたちよ。同じ船に乗り、ともに漕ぎだそう。われわれの頭上には「宗教」がある。われわれが従うべき輝かしい星だ。われわれのまえには偉人たちや、われわれの祖国や教義が残した輝かしい航跡がある。背後にはわれわれの若き兄弟や仲間たちが、おずおずと手本を待ち望んでいるのだ。」⁽⁴⁰⁾。

とはいえ、ラヴィルマルケはこのパンシオンにそれほど長く滞在したわけではなかった。一八三三年暮にそこに来た彼は、翌三四年には早くもガランシエーヌ通りのクール・デュ・コメルスに移っている。もっとも彼がパリで拠点としたのは、なにもこのパンシオン・バイイばかりではなかった。彼にとってより親密で心おきない集いが、この首都にはあった

のである。

VI パリのブルトン人

クルシー兄弟の屋根裏部屋

一八三〇年代、パリ在住のブルトン人が寄り集った代表的な場所は、「アシユランス・ジェネラル」Assurances Générales という保険会社であった。この会社を率いたのは、コルヌアイユ地方はカンペルレ出身のオーギュスタン・ド・グルキユフ Augustin de Gourcuff。 「恐怖政治」の際に父とともにハンブルクに逃れ、十年ほど亡命生活を送った彼は、そこで保険事業を学び、一八一八年、フランスでもっとも早い英独流のシステムによる保険会社を設立したのである。愛郷心に篤いグルキユフはまた職を求めて門を叩く同郷人を積極的に雇用し、その会社はパリ在住ブルトン人のコロニーという趣があった⁽⁴⁾。

ところで、「アシユランス・ジェネラル」に集うこうした多彩な階層の人々とは別に、当時パリにやって来るブルトン人のなかには、官公庁や大学を目指して上京してきた良家の子弟も大勢いた。そしてこの街には、そうした青年たちを遇するためのサークルもまた少なからずあった。その代表的なものが、ヴィクトワール通りのクルシー Courcy 三兄弟の「屋根裏部屋」であった。

サークルの主宰者、クルシー三兄弟とはどんな人物だったのか。この会合の中心となったのは、二男アルフレッド Alfred。「アシユランス・ジェネラル」の航海部門の責任者で、「海難者救助協会」の創設者でもあったが、また経済学にも通じ、仕事のかたわら詩や小説にも手を染める才人だった。詳細は不明だが、『バルザズ・ブレイス』の成立において

も少なからぬ貢献をしたと伝えられている。三男のポール Poi は、ほかの兄弟と同様、最初「アシユランス・ジェネラル」で働いたが、やがてブルターニュの考古学研究に専念するために職を辞し、サン・ポール・ド・レオンに移住。地元の新聞や雑誌に多くの論文を寄稿し、その道の専門家として知られた。長兄アンリ Henri は、アンリ・ド・ラロシユ・エオンの筆名で、バイイによって創刊されたカトリック系新聞『ユニヴェール』*l'Univers* で活躍したが、惜しくも早逝した。

毎週日曜日、彼らの屋根裏部屋に集う若者たちは、出身地こそカンペール、ヴァンヌ、ランデルノー、モルレー、ロリアン、ブレスト等々と多彩だったが、大半がバス・ブルターニュの出身者だった。おもなメンバーを挙げよう。すでに紹介したルイ・ド・カルネ、彼とともに『コレスポンダン』を編集したカザレス神父、言語学者ルゴニーデック Le Gonidec、三十年代からブルターニュの歴史研究をリードすることになる歴史家オーレリアン・ド・クルソン Aurélien de Cousson、のちに「ブルターニュ協会」*Association bretonne* の会長ともなる考古学者ヴァンサン・オードラン・ド・ケルドレル Vincent Audren de Kerdel'、ブルターニュの歴史研究や海洋小説でも知られた、ガブリエル・ド・ラランデル Gabriel de La Landelle、フランス銀行副総裁、ブルック侯爵 marquis de Pleuic、『マリー』*Marie* によって一躍有名になった詩人オーギュスト・ブリズー Auguste Brizeux、さらに『最後のブルトン人』*Les derniers bretons* の著者エミール・スーヴェストル Emile Souvestre など。いずれも、のちに各界で大きな活躍をすることになる人々が、この屋根裏部屋でその若き日を過ごしたのである⁽⁴²⁾。

ラヴィルマルケはパリ到着後ほどなくしてここの常連となる。おそらくは、当時の貴族の慣例に従って、ブルターニュを発つまえからパリに着いたらここに顔を出すよう誰かに紹介されていたのであろう。メンバーのなかで最年少のひとりだった彼は、おそらくその才気煥発さゆえに、このサークルでも「末っ子」として可愛がられたに相違ない。「彼はわれわれのささやかなサークルのなかで、誰よりも熱心だった。そして誰よりもブルターニュについて語るのが好きだった⁽⁴³⁾」

と語るのは、ラヴィルマルケと同年であったケルドレルである。

実際、ラヴィルマルケ自身、こう回想している。

日曜ごとに、皆はそこに故郷を、故郷のことばを、親しい本を、古い歌を、ときに衣装を、壁にかかった版画、きれいな空気、一片の空、暖かい心のこもったもてなしを、このうえなく勤勉で優しく献身的な故郷の息子たちを見いだすのだった⁽⁴⁴⁾。

この言葉には、おそらく彼がこのサークルに求めていたものが、素直に吐露されている。つまりラヴィルマルケはこのグループに、ほかならぬ故郷ブルターニユを見ていたのだ。パリに来てほどなく、この青年は紛れもなく故郷を懐かしがりはじめていたのである。もともとラヴィルマルケがブルターニユに執着する理由はそれだけではなかった。彼はパンション・バイイを離れる前に、おそらくはその図書室の片隅で一冊の書物と出会い、以来故郷にたいして胸中ひそかにひとつの使命感を抱くようになっていたのである⁽⁴⁵⁾。

ラリュ神父の著作

さて、ラヴィルマルケがパンション・バイイで手にしたと思しき書物とは、ラリュ神父 *abbé de la Rue* の『中世におけるアルモリカのバルドの作品に関する研究』*Recherches sur les ouvrages des Bardes de la Bretagne armoricaine dans le Moyen age* (一八一五年) という七十ページ程の小冊子であった⁽⁴⁶⁾。

著者のラリュ神父、すなわちジェルヴェ・ド・ラリュ *Gervais de la Rue* は、一七五一年、ノルマンディーの生まれ。カ

ンの大学で教鞭をとっていたが、大革命を機にロンドンへ亡命し、ワースの『ブリュ物語』*Brut* やマリー・ド・フランスなどのアングロ・ノルマン文学の作家たちを研究しながら、その成果をロンドンの古物協会でも発表していた。今日では、とりわけフランス文学の形成においてノルマンディーが果たした役割の重要性を強調したことで知られているが、オックスフォードで『ローランの歌』の最古の写本を発見するという功績でもまた名高い⁽⁴⁷⁾。ともあれ、早速その書物の内容を見ることにしよう。

冒頭、ラリュ神父は次のように言う。

トルバドゥールが南フランスを心地よい歌で虜にし、トルヴェールの英雄物語が北フランスに騎士道精神とその美德を広めるよりもはるか以前に、王国の西方にはケルト人のことばを話し、独特の詩歌をもった民族がいた。それは、数世紀来変わらぬ言語で記述されていた以上、おそらくはすぐれた詩歌であったに違いなく、しかもそれがフランス文学とガリア人の原始的な文学との幾つかの接点を与えてくれる以上、われわれにとってはこの上もなく貴重な詩歌である⁽⁴⁸⁾。

つまりラリュ神父がこの書物で主張していたのは、ブルターニュにはトルバドゥールやトルヴェールがフランスで活躍をはじめはるか昔から、ブルトン語によるすぐれた詩歌があった、ということだったのである。実際、「ブルターニュのレー」と呼ばれたこの詩歌には、中世のトルヴェールたちも称賛を惜しまなかった。しかし残念なことに、今日それが伝わるのはただフランス語や英語の翻訳によってのみであり、ブルトン語で書かれた原典はヨーロッパのどの図書館を探しても見つけることはできない。それゆえ、こうした詩歌がそもそも本当に実在したのかという根本的な疑問も、しばし

ば投げかけられてきた。たしかに、トルヴェールたちはそこから素材を採ったと語りはした。しかし、それは単なる決り文句、あるいは韜晦ではないのか、というわけである。ラリュ神父がこの小著で試みたのは、まさにこうした疑問への反論、すなわちブルターニユのレーの实在を主張することだったのである。

人はこう言うかもしれない。トルヴェールに賞賛されたアルモリカの原典は今日どこにも見つけることができないが、そうした作品のうち何ひとつ残らなかったなんてあり得ない、と。私はこう答えよう。その点に関して私は何の調査もしなかったし、そうした過去の文学的遺産が将来見つかる可能性がまったくないのかどうかもわからない、と。しかし、だからといって、そんなものは存在しなかったなどと結論することはできないだろう。いろいろな時代に、いろいろな国で、たくさんの著作家が逆のことを主張しているのだから⁽⁴⁹⁾。

たとえば、十三世紀にマリィ・ド・フランスは少なからぬレーをフランス語に翻訳した。のみならず彼女はまた、それが豎琴かロートの伴奏によって歌われたとも伝えている。十二世紀、ノルマンディーの学僧クレチャン・ド・トロワは、『獅子の騎士』、『エレックとエニード』、『クリジエス』など円卓の騎士を主人公とする少なからぬ作品を書いたが、これらもまたブルターニユのレーに想を汲むものと言われている。実際、舞台はブルターニユであり、登場人物もブルトン人である。この時代、こうしたレーはたいそう愛好され、少なからぬ数がラテン語やフランス語の散文に訳された。そして、こうした翻訳からさらにラテン語やフランス語による散文や韻文の円卓物語が生まれたのである。十四世紀には英語の韻文による作品も登場し、そればかりか北欧語による翻訳さえ現れた。その伝播の範囲はかなり広がったと見ていい、と著者はいう。

しかし今日伝えられている円卓物語は、こうしたレーの原型をそのままとどめているわけではない。それは物語化の過程でオリジナルにはないさまざまな変質をこうむった。ワースやクレチャン・ド・トロワはオリジナルに手を加えたことを隠さなかったし、生活のために歌うブルターニュのジョングルールたちは、新たな聴衆を得るべく素材に粉飾を施すことをためらわなかった。名高い『ブリタニア列王史』の著者ジェフリー・オブ・モンマスも、ブルターニュのレーに基づく書物の翻訳だと断ってはいるが、実際にはかなり原典に手を加えている。こうしてブルターニュを舞台とする円卓物語は、オリジナルにあったとはとても思えない「巨人」や「竜」や「蛇」や「妖精たち」が跳梁跋扈する「不思議」の場とも相成った。そしてこれら神話的要素は、従来言われてきたような東方に因るものではなく、おそらく聖書に基づくもので、「妖精」についてはもともとブルターニュを起源とするものなのだ、云々……。

故郷ブルターニュには、かつて素晴らしい文学的伝統があった——。首都に出てまだ日も浅いブルターニュ出身の一青年が、この書物を一読してどれほど誇らしい気持ちにさせられたかは想像に難くない⁽⁵⁰⁾。しかもこの書物は、まるでその青年を鼓舞するかのようになり、こう結ばれていたのである。

新しい研究によって文学の領域におけるブルターニュの貢献を数え上げ、それを郷土の誇りとするのは、ブルターニュの文学者の仕事である⁽⁵¹⁾。

ラリュ神父への手紙

「随分前から先生に手紙を差し上げたくてたまりませんでした。」——十九歳の青年は八三歳の老人に宛ててこう書き出す。日付は一八三四年十二月十一日である。

私は著作を通じて先生を存じ上げておりました。私はそうした著作を読み、研究し、考え、諳んじ、手元になくには書き写したりもしました。なぜなら私はブルトン人だからです。そう、先生が私たちの国の文学的栄光を燦然と輝かせて以来、ブルトン人は皆、私と同様に先生を称賛し、特別な敬意を抱いております。しかしひとつ残念なのは、先生が以後この種のものを出版されてないことです。ここまで書かれて止めてしまわれるなんて、あんまりです。しかし、私は先生に教えを受けた者として本当に感謝しておりますし、そのような者として、できれば先生の御助言を仰ぎたいのです。

先生がかつて「文学の領域におけるブルターニュの貢献を数え上げ、それを郷土の誇りとするのは、ブルターニュの文学者の仕事である」とお書きになったとき、十九年後にそれが現実のものとなるとは考えておられなかったのではないのでしょうか。しかし私は現にいま『ブルトン文学、およびその初期フランス文学との関連についての歴史』なる著作に取り組んでいるのです。私はまさに先生に触発されてこの著作を執筆しようと思ったのであり、もしこの著を捧げるべき方がいらつしゃるとすれば、それは先生を措いてほかにありません。

つきましては、こうした仕事のために特に参照すべき文献がありましたら御教示いただけないでしょうか。またそうした書物をどのように利用したらいいのか御助言を賜れば幸甚に存じます。⁽⁸²⁾

この手紙にラリュ神父は、一八三四年十二月二十四日付で次のような返事を送る。

あなた方のアルモリカのバルドについて、しかもその作品について書くなんて、われながら大それたことをしたものだと思います。というのも、そのとき私は彼らが自分たちの言葉で書いた詩を一行も知らなかったばかりか、そもそも

彼らの言葉についてすら無知だったからです。とはいえ、わが国の中世の詩人たちに関する研究を進めるうちに、彼らがしばしば「ブルターニュの短詩」について言及するのを目にしていたので、この種の詩が私の渉獵した文献に引用されているのを見つけたときには、それを書き留めておくことにしたのです。私にとって未知なるものながら、しかしフランスにおける最初の文学であるこれらの詩について私が書こうとしたとき、頼りにしたのはこうしたノート類だったのです⁽⁵³⁾。

ちょうどこの年、ラリュ神父は新たに加筆訂正を施したこの『研究』を、三巻からなる自著『アングロ・ノルマンのバルド、トルヴェール、ジョングルールの歴史に関する試論』*Essai sur l'Histoire des Bardes, Trouvères et Jongleurs anglo-normands* に再録したばかりだった。手紙はそのことに触れ、とりわけ第二巻と第三巻に収録された円卓物語に関する論考を読めば、さらに多くの情報を得られるだろうと述べている。しかし、彼はまたこう付言するのも忘れなかった。「私にあなたの仕事に関する指針を仰いだりしないでください。私は知らないのですから⁽⁵⁴⁾」。

ラヴィルマルケは失望しただろうか。もつとも神父はその著作のなかですでに同じ趣旨の発言を繰り返しており、こうした返答もあらかた予想されたものだったはずである。ちなみに、ラリュ神父はこの翌年に亡くなっている。ラヴィルマルケは、生前に書簡を交わせただけでも、まずは幸運としなければなるまい⁽⁵⁵⁾。

ところで、この書物と出会ったのち、ラヴィルマルケは少なくとも一八三四年の暮れまでには、古文書学校の自由聴講生になっている。これが、さきに引いたラリュ神父宛ての手紙の前か後かは分からない。いずれにせよ、翌一八三五年十月には正規学生として登録し、一八三七年五月二五日には修了証書を得て、晴れて「王立古文書学校卒業生」の称号を授与されている。ともあれ、ラヴィルマルケにとつてこうした経緯は、ブルターニュを発つときには想像もしなかったよう

なものであったに相違ない。彼はそこでラリュ神父への質問の答えを見つけただろうか。あるいはどんな本を読み、どんな勉強をしたのか。具体的なことは何も知られていないが、その成果はやがて『バルザス・ブレイス』のなかで詳細な註となつて結実することになるだろう。

(つづく)

註

- (1) Jean-Yves Guionar は以下のよつち名前を挙げつゝる。Louis de Carné, Eugène de la Gourmerie, Jules de Francheville, Aymard de Bloi, François Rio, Arbois de Jubainville. Cf. J.-Y. Guionar, *Le bretonisme: les historiens Bretons au XIX^e siècle*, Société d'Histoire et d'Archéologie de Bretagne et Imprimerie de la Manutention, 1987, P.62.
- (2) パンシモン・バイイについては、おまじ Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.23; J.-Y. Guionar, *op.cit.*, p.63 を参照。
- (3) 「善き研究会」については、おまじ Louis de Carné, *Souvenirs de ma jeunesse*, pp.27-31; P.M. Nicolas Burtin, *Le baron d'Eckstein*, E.de Boccard, 1931, p.141 を参照。
- (4) この部分は L. de Carné の記述を参照したが、これには Eugène de la Gourmerie の反論がある。「言わせてもらえば、そのなかには『ジュルナル・デ・デバ』もあり、そこで私はイエズス会を漫罵する記述を読んだことがある。一八二五年から一八三〇年にかけて、「善き研究会」の施設で、である」(E. de la Gourmerie, *Des origines de la presse religieuse*, p.12)。
- (5) Michil Largée (sous la direction de), *La Bretagne, Beauchesne/ Institut Culturel de Bretagne*, 1990, pp.71-72.
- (6) J. Y. Guionar, *op.cit.*, pp.64-65.
- (7) デクスタン男爵については、以下の二冊を参照。P. M. Nicolas Burtin, *op.cit.*; Louis le Gouillou, *Lettres inédits d'Eckstein*, PUF, 1984. ちなみに、カルネは叔父ケラトリー M. de Keratry に導かれてパリのサロンを逍遙するつち、ドートフイーユ夫人 Mme d'Hautefeuille のサロンでこの人物と出会ったという。デクスタンはパリのサロンで「仏陀男爵」baron Boudha と綽名され、その博識と饒舌で有

名だった。

- (8) *Ibid.*, III, p.171. cité par P.M. N. Burtin, *op.cit.*, p.242.
- (9) さらに言えば、これはケルトマニアとも同型の発想である。ちなみにケルトマニアについてデクスタンはつぎのように書いている。「知られるように、「ケルトマニア」は、言語（スコットランドのゲール語やウェールズ語）の性質に関するきわめて皮相な概念をもって、世界のいたるところでそうした言語に出会おうと主張して、ケルト語をギリシャ語やラテン語やドイツ語の仲間とし、ヘブライ語やカルデア語と同列に扱い、挙句は楽園のアダムはケルト語を話していたとまで言い放ち、それをいわば神の言葉の「顕現」ともしたのである」(*Le Catholique*, XI, p.197)。
- (10) 一八二九年に創刊されたこの新聞は、一八二八年に発布されたイエズス会の活動を禁止する法令をきっかけに、カトリックが自らの身を守るべく創設した「カトリック教擁護協会」*Association pour la défense de la religion catholique*なる団体の機関誌であった。ジャーナリズムのあらぬデマや中傷に関する情報を集め、それに即座に反論できるようにするのが創刊の目的で、*Correspondant*という名称もそこに由来する。編集に携わったのは、デクスタンの仕事を手伝っていた青年たちで、大方はバイイの「文学の会」のメンバーでもあったという。 Cf. E. de la Gournerie, *op.cit.*, p.21.
- (11) 「大革命」の理念に徹底して反対した雄弁家 Jacques-Antoine-Marie de Cazalès の息子で、一八〇四年生まれ。一八三五年—一八三七年にルーヴァン・カトリック大学教授、一八四三年に司祭に叙せられ、一八四八年、モントーヴァン大神学校校長、および憲法制定議会議員になる。
- (12) L. de Carné, *op.cit.*, p.249. もっともこの二つの雑誌の色合いは似てはいたが、しかしカルネ自身はラムネーを嫌っており、その過激な路線に同調することはなかった。
- (13) *Revue européenne*, Tome V, 1832, p.249.
- (14) *Ibid.*
- (15) *Ibid.*, p.251.
- (16) 知られるように、今日では、ブルターニュ地方は一度ローマ化され、もともとそこで話されていた大陸のケルト語は死滅したと考えられている。つまり現在のブルトン語は、のちにブリテン島からブルターニュに移住した島のケルト人の言語がもとになって

ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(二)

成立したものが定説である。

- (17) *Revue européenne*, Tome V, 1832, p.261.
- (18) *Ibid.*, p.269.
- (19) このカルネの主張はフレマンヴィルを下敷きにしている。「ド・フレマンヴィル氏は彼がケルト語で書かれたと考える物語のリストを示している。このリストには、なかならず『トリストタン』や『聖杯』や『泉のランスロー』がある。(……)ド・フレマンヴィル氏は、アンリ・プランタジユネットによって奪われたブルトン語による幾つかの本の原本は、いまなおロンドン塔かどこかイギリスの図書館に所蔵されていると考えている」(*Ibid.*, p.271)。
- (20) *Revue européenne*, Tome III, 1832, p.29.
- (21) *Ibid.*, p.31
- (22) *Ibid.*, p.40.
- (23) *Ibid.*, p.35. 彼はまたこうも言っている。「エドワーズ博士の観相学的な推論、ティエリ氏の歴史研究が出そろったいま、州の原型がなお執拗に残っているというのを誰が否定し得ようか」(*Ibid.*, pp.35-36)。
- (24) *Ibid.*, p.35.
- (25) *Ibid.*, p.33
- (26) *Ibid.*, pp.44-45.
- (27) カルネは『回想録』のなかでこう書いている。「私たちにもっとも有益な力添えをくれたのはデイジョンだった。ラコルデール Lacordaire がそのキャリアをはじめたデイジョン研究会は、定期的に『コレスポンダン』に記事を送ってくれた」(L. de Carné, *op.cit.*, p.176)。
- (28) 「ナシヨナリテ」の来歴に関する記述は、以下の論文による。Gérard Noiriel, *Socio-histoire d'un concept, les usages du mot «nationalité» au XIXe siècle*, Genèses 20, sept.1995, pp.4-23.
- (29) Friedrich Ludwig Jahn, *Recherches sur la nationalité, l'esprit des peuples allemands et les institutions qui seraient en harmonie avec leurs moeurs et leur caractère*, traduit de l'allemand par P. Lortet, 1825, v.

- (30) *Ibid.*, pp19-20
- (31) Frédéric Ozanam, *Essai sur la philosophie de Dante*, in *Deux œuvres de jeunesse*, Paris-Lyon, E. Vitte, 1913, p.108, cité par G.Noiriél, *op. cit.*, p.9.
- (32) Mgr Bannard, *Frédéric Ozanam, D'après sa correspondance*, J.de Grigord, Editeur, 1922. p.53. なお、オザナムについては以下の文献も参照。*Ozanam, Livre du Centenaire*, Gabriel Beauchesne, 1913; Bernard Cattaneo, *Frédéric Ozanam le bienheureux*, Cerf, 1997; Madeleine des Rivières, *Ozanam, un savant chez les pauvres*, Bellarmini/ cerf, 1997.
- (33) *Ibid.*, p.54.
- (34) *Ibid.*, p.53.
- (35) *Ibid.*, p.85.
- (36) ちなみに、一八三三年末に出版された小冊子にはこの「協議会」で取り上げられた主題が書いてある。オザナムは「詩とその影響」「聖職者と世俗人の行動」「哲学とキリスト教」などについて語り、ほかのメンバーは「マホメッティスム」「道徳的・物質的高」「絵付けガラス」「中世における建築術と彫像術」「ユダヤ人の立法」「宗教と哲学の現状」など。Cf. *Ibid.*, pp.85-86.
- (37) *Ibid.*, p.86.
- (38) *Ibid.*.
- (39) 「協議会」の議事録には、ラヴィルマルケ兄弟の名が記載されており、彼らがこうした討議に参加したことは間違いない。Cf. P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p.25.
- (40) La Villemarqué, *Frédéric Ozanam et son œuvre d'après ses lettres*, cité par P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p.25.
- (41) Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.22.
- (42) *Ibid.*, *op. cit.*, p.26; P. de la Villemarqué, *op. cit.*, pp.19-20; Docteur Louis Dujardin, *La vie et les œuvres de Jean-François-Marie-Maurice-Agathe Le Gonidec, grammairien et lexicographe breton 1775-1838*, Imprimerie commerciale & administrative, 1949, pp.91-100.
- (43) P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p.20, p.
- (44) *Ibid.*

- (45) ラヴィルマルケがパンシヨン・バイイでこの書物と出会ったというのは確認されている事実ではない。あくまでも Francis Gourvil の推測であり、この点ではその説をそのまゝ踏襲している。 Cf. Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz», Oberthur, 1960, p.10.*
- (46) この書物はラヴィルマルケが手にする以前から、ブルターニュではそれなりの反響を得ていたらしい。本文中で言及したカルネの論文やフレマンヴィルの作品には明らかにこの書物を参照した形跡が見られるし、Donatien Laurent は十九世紀初頭にブルターニュの名望家たちの間で口頭伝承の収集が盛んになった理由の一端を、この書物の影響に帰している。 Cf. D. Laurent, «La Villemarqué et les premiers collectes en Bretagne», in : Fanch Postic (éd), *La Bretagne et la littérature orale en Europe*, Centre de Recherche Bretonne et Celtique/ Centre de Recherche et de Documentation sur la Littérature Orale, 1999, p.155.
- (47) J.-Y., Guionar, «Le Barzaz-Breiz», dans *Les Lieu de mémoire*, (sous la direction de Pierre Nora), Gallimard, 1992, t.III, vol.2, 1992, pp.531-532.
- (48) Gervais de la Rue, *Recherches sur les ouvrages des Bardes de la Bretagne armoricaine dans le Moyen âge*, 1815, Imprimerie de F.Poisson, p.3.
- (49) *Ibid.*, pp.65-66.
- (50) ちなみに F. Gourvil はこう書いている。「もしこの小論文をブルターニュの父親の本棚で見つけていたら、その読書はたぶんいつかときの気晴らしにすぎなかっただろう。しかし、生まれてはじめて故郷を離れ、遠い異郷の地パリで読んだそれは、彼にとって啓示のよう思われたに相違ない」(F. Gourvil: *op.cit.* p10.)。
- (51) G. de la Rue, *op.cit.*, p.68.
- (52) Donatien Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p.318.
- (53) *Ibid.*
- (54) *Ibid.*, p.319.
- (55) ところで、このラリュ神父からの返信には、こんな記述がある。「あなたの探求の産物につきましましては、ご自分で見つけられた口碑の年代とその真正さを調べられ、誰か博識で私心のない考証家の判断を仰いだらいいでしょう。しかし私はあなたが収集なさつ

たものについても言うことはできません。私はそれを知らないのですから」(Ibid.)。この記述の脈絡について、F. Gourvilは、ラヴィルマルケがおそらく神父からの返事を待たずに、さらに詳しい二通目の手紙を送っていたのだらうと推測する。これにたいしてD. Laurentは、むしろラヴィルマルケが誰かに手紙を託し、その人が彼の収集の成果についてラリュ神父に話したと考えた方が自然ではないかと述べている。Cf. Ibid., p.317.